

「満洲事件費」はどのように使われたか(4)

平井 廣一

目次

1. 混成第4旅団の満洲事件費
2. 派遣初期の第8師団の満洲事件費
3. 「熱河作戦」の概要
4. 第8師団と「熱河作戦」
5. 第8師団と「河北作戦」
6. 「熱河・河北作戦」期の第8師団の満洲事件費
7. 第6師団の満洲事件費

【要旨】

第8師団は、満洲事変勃発2カ月後の1931年11月に混成第4旅団としてその一部が満洲に派遣され、翌年4月に派遣された部隊を加えて満洲派遣第8師団となった。同師団は、関東軍や第6師団とともに、張学良軍を熱河省から掃討する「熱河作戦」と長城線を越えて中国軍を南に追いこむ「河北作戦」の中心部隊となった。同師団が計上した満洲事件費は、俸給と食糧費である糧秣費が大部分を占め、軍需品を馬車やトラックによって輸送するための運輸費、及びこれらの輸送に関わる人夫に支払われる傭人費も無視できない金額に達していた。第6師団の事件費も、糧秣費と運輸費の比率が高いという点では第8師団と同様であった。

1. 混成第4旅団の満洲事件費

第8師団(衛戍地は弘前)は、満洲事変勃発2カ月後の1931年11月に同師団から抽出された混成第4旅団として、さらに翌32年4月には留守部隊を除く師団の主力が満洲に派遣された。満洲での任務は、遼西(熱河省遼河西方)地方の警備であり、翌33年2月に「熱河作戦」が展開されるとその中軸となり、その後は熱河省の治安維持に当たった。そして34年3月に第7師団(旭川)と駐箚を交代して帰還した⁽¹⁾。

満洲事変勃発後、混成第4旅団として派遣された部隊の編成を示したのが表1である。歩兵第5連隊(青森)、第31連隊(弘前)、第17連隊(秋田)、第32連隊(山形)の4連隊から抽出された各1大隊の計4大隊と、騎兵第8連隊(弘前)からの1中隊、野砲兵第8連隊(弘

前)からの2中隊に加えて、通信隊と衛生班によって構成されていた。

旅団の総員は判明しないが、満洲事変当時駐箚していた第2師団(仙台)の編成⁽²⁾を参考にすると、1中隊は145名、機関銃隊は161名によって編成されていたので、第4旅団の場合は、歩兵中隊16で $145 \times 16 = 2320$ 名、機関銃隊4で $161 \times 4 = 644$ 名、仮に騎兵連隊と野砲兵連隊の各中隊を歩兵中隊と同じ145名とすると、3中隊で $145 \times 3 = 435$ 名で計3399名となる。これに通信隊と衛生班が加わるので総計4千数百名の部隊であったということができよう。

次に、混成第4旅団の行動の概要は、同旅団長鈴木美通の「上奏」によれば以下のようである⁽³⁾。

同旅団は、31年11月11日に編成下令を受け、14日早朝各衛戍地を出発、20日に奉天に到着

表1 混成第4旅団編成表

旅団司令部		旅団長	少将 鈴木 美通	
歩兵第5連隊	青森	第2大隊	第5～第8中隊	機関銃隊
歩兵第31連隊	弘前	第2大隊	第5～第8中隊	機関銃隊
歩兵第17連隊	秋田	第3大隊	第9～第12中隊	機関銃隊
歩兵第32連隊	山形	第2大隊	第5～第8中隊	機関銃隊
騎兵第8連隊	弘前			第2中隊
野砲兵第8連隊	弘前			第1・第2中隊
通信隊				
衛生班				

出所：「混成第4旅団職員表 昭和6年12月25日調」
(C13070937100)

表2 混成第4旅団
満洲事件費

(31年11・12月分)

俸給	-
需品費	15,000
郵便電信費	1,000
糧秣費	45,908
被服費	-
兵器費	1,230
馬匹費	400
演習費	-
患者費	850
運輸費	3,000
築造費	1,500
旅費	500
備給	6,000
諸手当	-
接待費	-
雑費	10,000
計	85,388

出所：C04011125800

して同地の警備に就いた。11月17日には天津方面の情勢が緊迫したので、錦州攻撃に備えて溝帮子付近に前進したが、装甲列車で武装した張学良軍の抵抗を受け、関東軍による攻撃中止命令によって28日に奉天に帰還する。

11月30日には、馬占山軍が齊々哈爾を奪回するとの情報を受けて、現地の日本軍の救援を行なうべく12月3日には齊々哈爾に到着、同地の警備に当たった。馬占山は32年2月の時点では満洲国に忠誠を誓い、同月24日には黒龍江省の省長に就任したが、張学良による翻意慫慂もあり、4月2日に黒河方面に逃亡した。そして同旅団は、齊々哈爾地方の警備を歩兵第15旅団に譲り、4月22日に錦州において、満洲に到着した第8師団の隷下に復帰した。

このように、同旅団は派遣以降約半年間で、齊々哈爾から敦化、通遼、錦州に至る広範囲に渡り延べ82回の治安出動を行ない、戦死者下士官以下11名、負傷者将校以下45名、病死者2名の犠牲者を出した。

表2が派遣間もない31年11月と12月分の混成第4旅団の満洲事件費である。総額8万5千円のうち、糧秣費が4万5千円で約半額を占め、需品費1万5千円、雑費1万円、備給6千円と統

表3 満洲事変(満洲・上海・華北)派遣部隊(34年1月まで)

31.9.23		32.2.2		2.24		第12師団	山砲兵1中隊	
第20師団	歩兵1旅団	近衛師団	無線電信小隊2	近衛師団	気球中隊	7.1		
	騎兵1中隊		飛行大隊1		無線電信小隊3	北支那派遣部隊		
	野砲兵1連隊	第3師団	野戦重砲兵大隊1	兵站電信中隊1	9.19			
	工兵1中隊		野戦高射砲隊2	野戦予備病院班1	第7師団	混成旅団1		
通信隊1	第9師団	飛行中隊1	患者輸送部班1	第3師団	騎兵旅団1			
飛行2中隊		師団1 留守部隊1	第3師団	輸送監視隊4	12.6			
11.11	第12師団	戦車中隊1	第5師団	兵站自動車中隊1	33.5.8			
第8師団 混成旅団(第4旅団)1			第6師団	水上輸卒隊3				
近衛師団 関東軍飛行隊本部	第12師団	混成旅団1	第8師団	兵站司令部1	第3師団	補充馬廠		
11.16		攻城重砲兵中隊1	4.2		9.7			
第3師団 飛行中隊1	第1師団	兵站自動車中隊1	朝鮮軍	間島派遣部隊	第1師団	歩兵中隊2		
第12師団 飛行中隊1		第5師団	工兵隊1	4.5		第4師団	歩兵中隊1	
第20師団 飛行中隊1	2.23			近衛師団	飛行中隊1	第7師団	歩兵中隊2	
12.17		参謀本部	軍司令部1		鉄道連隊1	第12師団	山砲兵中隊1	
近衛師団	野戦重砲兵中隊1	近衛師団	無線電信隊本部1	第8師団	同補充隊1	34.1.20		
			輸送監視隊1		鳩小隊1			
第1師団	野戦自動車隊1	第1師団	軍兵器廠1	第10師団	師団1(混成第8旅団)			
			鉄道中隊1		軍倉庫1	6.25		
第5師団	臨時派遣隊1	第3師団	飛行中隊1	第1師団	歩兵1大隊			
第10師団	混成旅団1	第5師団	工兵中隊1	6.26				
第12師団	戦車隊1	第12師団	攻城重砲兵中隊1	第4師団	歩兵1大隊	工兵1小隊		
			野砲兵大隊1			第7師団	歩兵1大隊	
野戦重砲兵大隊1	第9師団	軍憲兵隊	6.27					

出所：『公文別録・大蔵省・陸軍省・海軍省・司法省・大東亜省・大正12年～昭和19年・第1巻』(A03023587500～A03023590200)

く。さらにその内訳をみると、需品費には備品費、採暖費、燈火費、雑費には宿舍料、乗用自動車貸切費、傭給には自動車運転手、雑役、通訳等の雇入費が含まれている。

ところで、この混成第4旅団には、第1師団から応援があり、その経費は第1師団の満洲事件費から支出されている。実は、満洲事変は前稿⁽⁴⁾で示したように、第2師団や第20師団、上海事変での第9師団のように師団単位での派遣のほかに、表3のように、大隊や中隊、あるいはそれ以下の単位でも派遣が見られる。ここで検討している混成第4旅団には、第1師団から患者輸送班（表3では12月17日編成）が第1師団から派遣されている。

すなわち、第1師団は、混成第4旅団患者輸送班（および表3にはないが衛生班も含む）と関東軍野戦自動車隊の編成派遣費及びこれに伴う師団管轄下の衛戍病院の欠員補充費として、31年12月9日に1370円⁽⁵⁾、12月26日に1164円⁽⁶⁾、32年1月26日に647円⁽⁷⁾、2月12日に1740円⁽⁸⁾を、3月5日には衛生班要員、患者輸送班要員の欠員補充、戦病死者の遺骨受領等の経費として717円を満洲事件費として申請している⁽⁹⁾。

2. 派遣初期の第8師団の満洲事件費

第8師団は、1932年4月、先遣隊として派遣されていた混成第4旅団を統合して満洲派遣第8師団として再編され、表4のような編成をとっていた。各歩兵連隊と野砲兵連隊がそれぞれ1大隊を増加して2大隊制をとり、新たに工兵第8大隊が加わっている。

当時の第8師団は、熱河省内の遼河西部地域の警備が主たる任務であったが、関東軍は発足間もない満洲国軍（満洲国に帰属する軍隊）とともに、反満抗日軍の討伐に明けくればならなかった。表5は、1932年中に満洲国軍が出兵した反満抗日軍との戦闘の一覧である。同表の左の番号のうち、1・4・7・

表4 満洲派遣第8師団編成表

師団長：西 義一		参謀部	副官部	管理部	経理部
		軍医部	獣医部	法務部	
歩兵 第4旅団	歩兵第5連隊	青森	第1・第2大隊	第1～第3 第5～第7中隊	機関銃隊
	歩兵第31連隊	弘前	第2・第3大隊	第5～第7 第9～第11中隊	機関銃隊
歩兵 第16旅団	歩兵第17連隊	秋田	第1・第3大隊	第1～第3 第9～第11中隊	機関銃隊
	歩兵第32連隊	山形	第1・第3大隊	第1～第2 第5～第7中隊	機関銃隊
	騎兵第8連隊	弘前		第2中隊	
	野砲兵第8連隊	弘前	第1・第3大隊		
		盛岡	工兵第8大隊		
	衛生班				
	通信隊				
	輸送監視隊				

出所：「満洲派遣第8師団将校同相当官職員表 昭和7年4月30日調製」(C13070915000)

表5 1932年の満洲国軍と反満抗日軍との戦闘

	月	戦闘名	参加兵力	抗日兵力	摘要
1	3月～6月	反吉林軍討伐	7,000	20,000	日本軍と協力
2	5月～6月	第1次東遼道肅清	4,000	20,000	
3	4月～7月	馬占山討伐	5,000	16,000	
4	5月	李海青討伐戦	6,000	10,000	日本軍と協力
5	6月	馮占海討伐戦	1,600	15,000	
6	7月	李海青残匪討伐	1,500	2,000	
7	6月～7月	第1次馮占海討伐戦	7,000	15,000	日本軍と協力
8	8月	蒙匪討伐	2,500	2,000	
9	8月	殿臣匪來襲	700	3,500	
10	9月	第2次馮占海討伐	7,000	10,000	日本軍と協力
11	9月～12月	蘇炳文討伐	4,500	20,000	
12	10月	第2次東遼道討伐	8,000	20,000	日本軍と協力
13	10月	李海青匪討伐	3,500	3,000	
14	11月～12月	吉奉龍地区討伐	5,000	5,000	
15	11月～12月	第3次東遼道討伐	5,000	20,000	

出所：「建国以後ニ於ケル満洲国軍主要作戦参加状況」(C1301002930)

10・12の戦闘は、「摘要」の欄にあるように日本軍の協力を得た戦闘である。

また表6は、第8師団の主力が派遣された32年4月中に関東軍が行なった抗日軍との戦闘のうち、第8師団下の第31連隊第2大隊と第17連隊中1中隊が出兵した戦闘の一覧である。4月の30日間で大隊が4回、中隊が1回の計5回出兵して抗日軍各40～50名から1000名と戦闘を行なっているが、犠牲者は負傷1名とわずかである。

派遣直後の1932年4月から7月までの第8師団の満洲事件費が表7である。まずその総額は、4・5月分が43万2千円、6・7月分が52万7千円とおおよそ50万円、1カ月では25万円である。

次に内訳をみると、糧秣費と俸給が各30%

表6 第8師団参加の戦闘 (1932年4月)

日付	出動部隊	協力部隊	場所	戦闘の概要	日本側の損害	抗日軍の損害
4月3日	第31連隊第2大隊	騎兵第10連隊の一部	青堆子北東16km 喬家屯	約1000の抗日軍と交戦、撃退	負傷1	死者約50～60
4月6日	上同		青堆子北西16km 元宝房	約700～800と交戦、撃退		損害多大の見込
4月9日	上同	騎兵第10連隊の1中隊	青堆子北西20 km 八家子付近	数100と交戦、多大の損害を与える		死者約180・捕虜160
4月11日	上同	騎兵第10連隊の1中隊	青堆子南西8 km 娘々廟付近	40～50と交戦、撃退		死者15
4月23日	第17連隊1中隊		溝帮子北方8 km 常興店付近	数名から射撃を受け応戦		死者2

出所：「兵匪討伐状況一覧表 (4月) 昭和7年5月1日 関東軍参謀部」(C04011272200)

表7 派遣当初の第8師団満洲事件費

(円)

	32年4・5月	6・7月
俸給	127,906 (29.6)	177,800 (33.7)
需品費	31,148 (7.2)	33,252 (6.3)
郵便電信費	3,500 (0.8)	1,730 (0.3)
糧秣費	141,031 (32.6)	183,663 (34.8)
被服費	1,576 (0.4)	2,043 (0.4)
兵器費	8,168 (1.9)	9,430 (1.8)
馬匹費	984 (0.2)	1,800 (0.3)
演習費	2,609 (0.6)	2,881 (0.5)
患者費	300 (0.1)	500 (0.1)
運輸費	31,625 (7.3)	38,973 (7.4)
築造費	20,000 (4.6)	10,000 (1.9)
旅費	4,200 (1.0)	2,000 (0.4)
備給	30,534 (7.1)	24,417 (4.6)
諸手当	2,075 (0.5)	1,850 (0.4)
接待費	-	-
雑費	26,554 (6.1)	36,690 (7.0)
計	432,210 (100.0)	527,029 (100.0)

出所：32年4・5月分=C04011308100・C04011256000
6・7月分=C04011349200

と突出し、これに続くのは運輸費と需品費、それに備給である。これに対して、郵便電信費、被服費、兵器費、馬匹費、演習費、患者費の比率は低い。

4・5月分の糧秣費14万1千円の内訳は⁽¹⁰⁾、精米3822円、精麦1302円、高粱4862円等の他に、賄料すなわち自炊時の副食費7万7687円、請負賄料2万5740円、加給品4379円等であり、副食費の比率が高い。

同じく4・5月分の俸給12万7千円の内訳は、①中将(師団長)月俸750円のうち留守宅渡し500円を差引いた差額250円(5月分)と4月分(3分の1ヶ月分)83円で計333円、②少将(旅団長)2名(月俸624円)555円、③大佐(同518円)9名2074円、④中佐(402円)9名1609円、⑤少佐(291円)27名3494円、⑥尉官220名1万6531円、⑦准士官(同120円)83名4703円、⑧曹長(同管内53円90銭・営外107円20銭)150名1万1501円、⑨軍曹(同27円60銭)318名1万1702円、⑩伍長(同15円60銭)67名1393円、⑪上等兵(10円24銭)719名9816円、

⑫1・2等兵(同8円80銭)4560名5万4560円となっていた。

運輸費3万1千円の内訳は、准士官以上の兵員の私物送付費331円しか判明しない。需品費は備品費、事務用品費、燃料費等がある。また備給3万円は、通訳、筆生、運転手、馬丁、雑役夫、苦力、技術者、厨房夫、縫靴夫、計手代用雇員等への支払であるが、その中でも通訳への支払が1万500円と全体の3分の1を占めている。

6・7月分52万7千円の各経費の構成比⁽¹¹⁾は、4・5月分とはほぼ同じで、俸給と糧秣費の割合が大きい。このうち俸給は各兵員の月俸であり、糧秣費はこれも4・5月分と同様に精米、精麦、高粱、賄料、加給品等からなっている。

4・5月分の運輸費の内訳は、総額3万8973円のうち、「支那馬車」延べ5033台の雇賃として3万2207円、常備トラック93台の雇賃3720円、梱包箱代1674円等が計上されている。

このように第8師団の満洲事件費を検討すると、師団が負担する経費は俸給や食糧等のいわゆる生計費の比率が極めて高いことが分かる。これに対して、兵器費については、4・5月分の兵器費8168円は兵器・自動車とサイドカーの修理費に、6・7月分と同費9430円にはこれらの修理費に加えて、ガソリン代2199円が加わって9430円となっており、作戦に必要な武器、つまり部隊の移動に係る運輸費と馬車等の輸送手段や各種の工夫への備給が作戦経費ということになろう。

第8師団の主力が満洲に派遣された32年4月から7月にかけての時期は、表5・表6で示したように、第8師団以外に関東軍や満洲国軍が反満抗日軍と大規模な戦闘を行

なっている。ちなみに同時期にあたる32年4・5月分の関東軍の満洲事件費⁽¹²⁾の総額は、追加分を含めて364万円にも上り、第8師団の事件費43万円の8倍にもなっているが、その主要経費は、糧秣費120万円（33%）、築造費80万円（22%）、俸給63万円（17%）であり、ここでも兵器費は14万円と4%を占めるにすぎない。つまり師団単位で計上される満洲事件費は、基本的に人件費と食糧費を中心として支出され、兵器弾薬費等は、兵器本廠の支出によって担われることになる（その一部については前稿で検討した）。

3. 「熱河作戦」の概要

熱河省を満洲国の領土とし、満洲国擾乱の根源とされた張学良軍を覆滅することを目的に実施されたのが「熱河作戦」である⁽¹³⁾。

この作戦は、まず張学良軍に決定的な打撃を与えるため、日本軍と満洲国軍が熱河省東部及び同省と河北省の省境に進出して熱河省と華北を確実に分断する。次に熱河省内の抗日軍を西部若しくは南西部に追い込みつつ、東方に脱出しようとする同軍を満洲国が包圍して殲滅する。さらに関東軍から作戦命令が下る場合は、長城を超えて河北省内においても行動を起こす。作戦は1933年2月下旬から始めて結氷期に終結させ、その後日本軍と満洲国軍は、速やかに満洲国全土で分散配置を敷いて高粱繁茂期前に治安工作を完成するというものであった。

次に、この作戦のための作戦軍は次の2つに区分された。第1に、第6師団（熊本）に配属される部隊として、①騎兵第4旅団（第3師団所属、豊橋）、②騎兵第10連隊（第10師団所属、姫路）、③第14師団（宇都宮）派遣部隊、④関東軍自動車1中隊、⑤第2装甲列車の5部隊があり、これらに加えて第6師団の区処（指示）を受ける部隊として満洲国軍が配備された。

第2に、第8師団（青森）に、①混成第14旅団、②戦車隊、③15センチ榴弾中隊、④列車重砲兵隊、⑤関東軍自動車隊、が配備され、また第8師団と同様に区処部隊として満洲国軍が配備された。

さらに関東軍の直轄部隊として、①第10師団派遣混成旅団、②関東軍飛行隊、③同電信隊、④関東軍増加自動車中隊、⑤第14師団輜重兵中隊、⑥鉄道連隊、⑦第1・第2兵站司令部、⑧補給諸廠、⑨輸送機隊が配備された。

またこれらの動員諸部隊は以下のような地域に集中配備された⁽¹⁴⁾。(1) 第6師団は通遼付近の打通線沿線、(2) 第8師団は朝陽付近、(3) 第8師団隷下の混成第14旅団は綏中付近。またこれらの部隊の間隙には満洲国軍を配置した。加えて、これら熱河省以外にも、奉天に混成第33旅団を配備したほか、関東軍司令部は作戦期間中は錦州に移動して全軍を統率した。

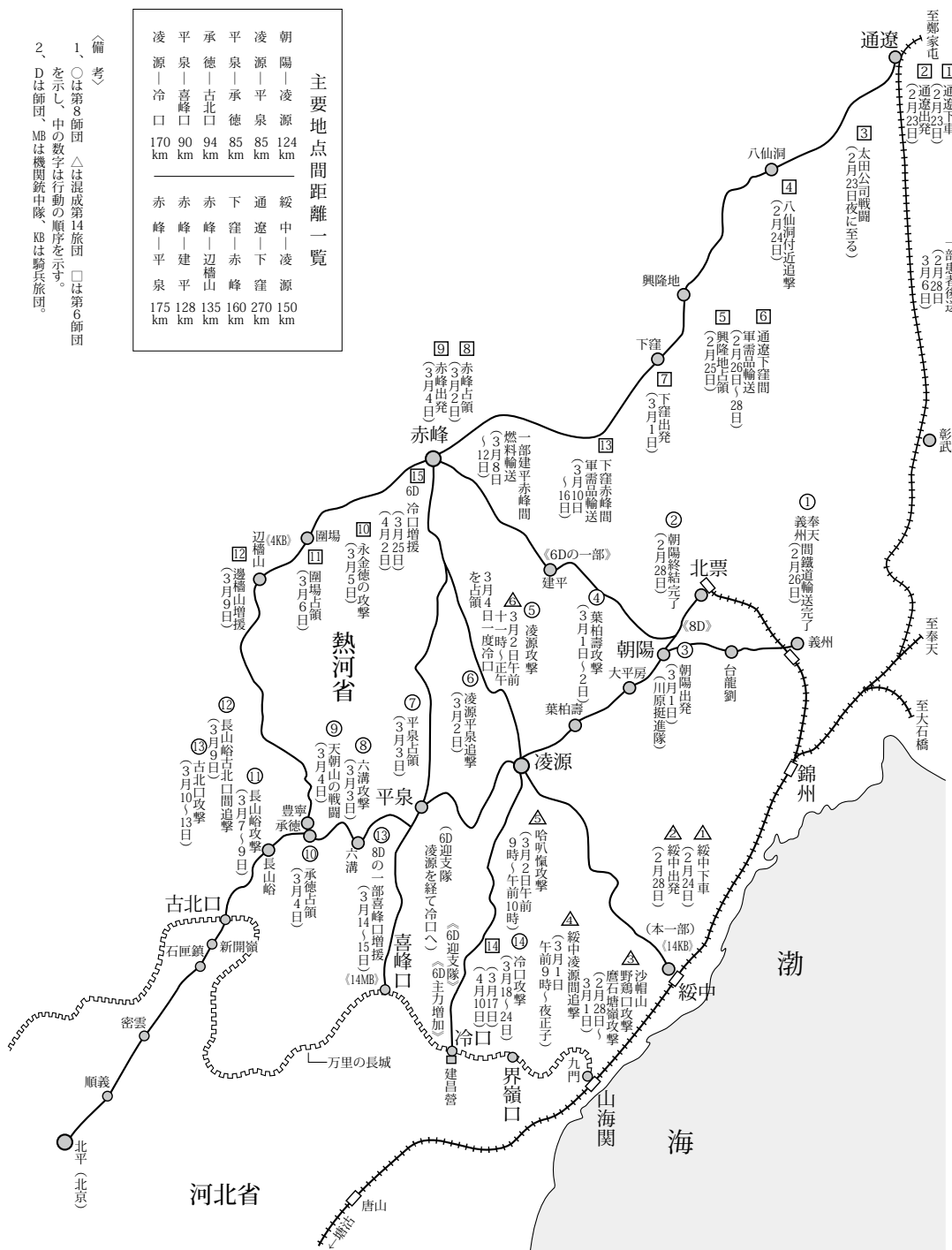
4. 第8師団と「熱河作戦」

第8師団による「熱河作戦」における行動は以下のものである（熱河・河北作戦については図1参照⁽¹⁵⁾）。同師団は、32年4月20日に、先着していた混成第4旅団を合流させて満洲派遣師団の編成を完了し、23日から先遣部隊の第20師団（衛戍地は京城市内の龍山）と交代して遼西地区一帯を警備しつつ、当時熱河省で活動を活発化させていた張学良義勇軍に対する警戒を強化した。

第8師団参謀長・小林角太郎は、関東軍に対して、張学良軍の動きを探るための諜報機関の設置を検索したが、当時の関東軍は北方作戦に全力をあげており、熱河省に対してはあまり軍事的な刺激を与えないように第8師団に指示した。

さらに5月28日、同師団の吉岡安直参謀は、熱河省北票で、同省代表・邵参謀と、満洲国及び奉天鉄道（奉天－山海関鉄道）北票線の

図1 熱河・河北作戦関係図



出所：「昭和8・2・19～8・4・3 関東軍自動車隊行動概要図」(C14030467900)

連絡等に関する打ち合わせを行ない、張学良軍に対する諜報機関の設置を説得した。さらに29日には、関東軍参謀長橋本虎之助が錦州を訪問し、諜報機関の設置の当否について第8師団と相談している。この席でも師団は、機関の必要性和熱河省の民衆に対する宣伝招撫の必要性を力説した。

6月12日、今度は第8師団長・西義一が奉天の関東軍司令部を訪問し、再度、宣伝招撫策による熱河省の平和的な満洲国への帰属と、これに要する諜報機関費の支出を関東軍に要求した。また師団は、この方針に従って熱河省朝陽地方の有力者である畢鎮一や呂伴林を通ずる宣撫工作に着手した。さらに、6月26日には、満洲国は熱河省を併合し、歳入確保のための阿片専売制導入をめざして、財政部税務司企画科長・天野竹蔵を錦州に派遣した。天野は吉岡参謀とともに邵参議を訪問、同省北票方面の阿片を買収のための折衝を行なっている。

7月17日、関東軍の囑託連絡員として北票に駐在していた石本権四郎が、奉山鉄道北票線で錦州に向う途中、約300名の反満抗日軍に襲撃されて拉致されるという事件が起こった（「石本事件」）。これに対して第8師団第31連隊（弘前）が出動、抗日軍との戦闘のち朝陽寺駅を占拠した。第8師団は、この事件には張学良軍下のいわゆる熱河正規軍が関係していることは確実であるとして、北票までの進出を関東軍に提言したが、関東軍は時期尚早としてその動きを押しとどめた。

8月に入って、第8師団はこの事件を契機に張学良軍追討のための熱河作戦の研究を開始するが、この動きに対して関東軍参謀副長・岡村寧次が、関東軍指導部の意見として、熱河攻略は出来る限り政治工作と謀略によることとし、やむをえない場合にのみ武力を使用するという方針を伝えた。

9月に入っても石本事件は解決せず、奉天の関東軍司令部は参謀長会議最終日の28日に

熱河問題を討議、参謀長小磯国昭が10月14日に錦州を訪問、満洲国軍を最前線とし、第8師団を後方支援とする熱河攻略作戦を3期に分けて行なう旨を内示した。さらに同月28日には東京の参謀本部から第二部長・永田鉄山と関東軍奉天特務機関長・板垣征四郎が来錦して熱河計略方針を研究した。

このように、熱河攻略作戦は、関東軍の指導の下、参謀本部と第8師団の強い連携の下に準備されていることがわかるが、12月には古庄幹郎・参謀本部第一部長が来錦して、熱河作戦は国際連盟による干渉の余裕を与えず、一挙に展開することが重要であると注意を促した。

明けて1933年1月1日、第8師団山海関守備隊が中国軍から射撃と爆撃をうけて翌2日に全面的に衝突（第3次山海関事件）、歩兵第5連隊（青森）と31連隊（弘前）を主力とする第4旅団（旅団長・鈴木美通少将）が出動して4日には山海関を占領した。

1月27日、関東軍司令官は、熱河作戦準備等に関して第8師団に訓示を与えた後、翌28日には、第8師団に加えて第6師団に対しても2月24日までに配備変更並びに前進準備を整えるよう命令を下した。

2月17日、関東軍は熱河攻略作戦の開始を命令、第1期作戦の開始は2月23日、第2期作戦開始は27日とした。この命令を受けて第8師団は18日から行動を開始、第1期作戦として第4旅団の北票と朝陽の占領、服部旅団（第6師団）の綏中付近の集中、遼西警備交代等を命令した。この第1期作戦に参加した部隊は表8の通りである。

同表で、先遣隊の歩兵第4旅団の第32歩兵連隊、第5及び第17連隊の乗馬小隊、騎兵第8連隊、野砲兵第8連隊、工兵第8大隊は第8師団に所属しているが、混成第14旅団は新たに作戦に参加した部隊であり、第7師団（旭川）から抽出された。その編成は表9の通りであり、先に検討したように第2師団の人員構成

表8 第1期熱河作戦参加部隊

先遣隊	隊長 歩兵第4旅団長 少将 鈴木 美通 第32連隊 第5連隊・第17連隊の乗馬小隊 騎兵第8連隊 野砲兵第8連隊 工兵第8大隊主力 衛生班の一部
混成第14旅団	隊長 混成第14旅団長 少将 服部兵次郎 歩兵第5連隊 関東軍自動車1中隊 (50台)
第8師団主力	師団司令部 歩兵第16旅団 臨時重砲兵中隊 臨時戦車隊 工兵第1中隊 衛生班主力 関東軍自動車隊 師団輜重兵中隊
遼西警備隊	隊長 大佐 秋山 山海関及び九門警備隊 歩兵第5連隊第3大隊 野砲兵1中隊 山砲1 列車重砲兵隊 戦利迫撃砲隊 歩兵第4大隊 (主として初年兵による集成部隊) 騎兵・砲兵・工兵の残置部隊

出所：「第8師団熱河作戦経過の概要(第1号) 昭和8年2月20日至3月12日」(C1301011100)

表9 混成第14旅団編成表

司令部	旅団長	少将	服部兵次郎	
歩兵第25連隊	札幌	第2大隊	第5～第7中隊	機関銃隊
歩兵第26連隊	旭川	第2大隊	第5～第7中隊	機関銃隊
歩兵第27連隊	旭川	第1大隊	第1～第3中隊	機関銃隊
歩兵第28連隊	旭川	第2大隊	第5～第7中隊	機関銃隊
騎兵第7連隊	旭川		第2中隊	
野砲兵第7連隊	旭川	第2大隊	第4・第5中隊	
通信隊				
自動車隊				
衛生班				

出典：「混成第14旅団将校同相当官職員表 昭和7年10月1日調」(C13070914800)

を当てはめると、歩兵・騎兵・野砲兵合わせて15中隊2175名、機関銃中隊4で644名、計2819名となる。これに通信隊と自動車隊、衛生班を加えると総勢約3千名の部隊であったと推測できる。

一方、第6師団隷下の第11旅団(旅団長・松田団)は、2月19日に義州に入り、それ以降朝陽攻撃までは第4旅団の指揮下に入ることとなった。第4旅団は、当初の予定を2日繰上げて20日に移動を開始、22日には北票を占領した。

長城の重要関門占領を目的とする第2期作戦は、当初2月27日開始とされていたが、兵力の移動に予想外の時間を要したため、3日延期して3月1日開始とした。

関東軍は、この熱河作戦を「今次事件〔満洲事変〕の最後の聖戦」として位置付けてお

表10 第2期作戦参加部隊

挺進隊	隊長 第16旅団長 少将 川原侃 歩兵第16旅団司令部 歩兵第17連隊 戦車隊 特設山砲1中隊 工兵第2小隊 衛生班 関東軍自動車隊 (本部及び1中隊)
騎兵隊	騎兵第8連隊 乗馬小隊 特設山砲1中隊
前衛	司令官 歩兵第32連隊 野砲兵第2大隊 工兵1小隊
本隊	司令部 歩兵第4旅団 歩兵第16旅団の残余部隊 野砲兵第8連隊主力 臨時重砲兵中隊 工兵第8大隊 衛生班の主力 師団輜重兵中隊
混成第14旅団	

出典：表5に同じ。

り、2月24日には軍司令部を錦州に前進させている。

第2期作戦に参加した部隊は表10のとおりである。このうち挺進隊は、第16旅団長に率いられて、隷下の歩兵第17連隊(秋田)をはじめ、戦車隊と関東軍自動車隊を指揮下に入れている。またその他の前衛部隊や本隊等も概ね第8師団から構成されている。

また本隊の歩兵第4旅団は、第32連隊(山形)、第8師団隷下の騎兵、砲兵、工兵の各部隊、第6師団第11旅団を指揮して25日に朝陽を占領した。

さらに同日、第8師団は混成第14旅団の行動開始を命令、同旅団は28日までに熱河省の省境を出発して前進した。また第1期作戦によって当初の目的を達成したと判断した第8師団司令部は、27日に錦州から朝陽に前進した。

2月28日、第8師団主力は朝陽に集結を終え、翌日3月1日の満洲国建国1周年に合わせて第2期作戦を命令した。

第2期作戦は、まず騎兵隊、第16旅団によって構成され先陣を切る「挺進隊」、「前衛隊」、及び「本隊」が朝陽を出発して、挺進隊は平泉を、その他の部隊は凌源を目標にして前進した。挺進隊は翌日に凌源を占領、続いて

平泉に達し、3月4日に承德を占領した。

同日、第8師団に第2期作戦開始の命令が下され、混成第33旅団が第8師団の指揮下に入り作戦行動を開始した。また混成第14旅団の挺進隊は冷口を占領した。

6日には師団司令部が承德に入場するとともに、第17連隊は長城の重要関門である古北口に向けて進撃を開始、9日に古北口を占領した。また10日に第14旅団と第33旅団が古北口以外の主要関門を占領した。28日は騎兵第8連隊が満洲国軍を指揮して豊寧を占領した。長城の重要関門を占領する第2期作戦に参加した部隊は表10に示される。

5. 第8師団と「河北作戦」

熱河作戦は、第8師団を中心とする諸隊が長城の重要関門を占領して3月下旬には一段落した。以下は、長城線を越えて5月末の塘沽停戦協定に至るまでのいわゆる「河北作戦」の経過である⁽¹⁶⁾（図1参照）。

第8師団は、混成第14旅団、混成第33旅団等の配属部隊を合わせて3月末までに、冷口を除く長城の重要関門を占領し、第6師団から部隊の配属を受けて冷口を攻撃中に4月を迎えた。関東軍は、速やかに冷口を占領し、長城の重要関門をすべて制圧する方針を固め、第6師団主力に冷口を攻撃させ、第8師団にその援護を行なわせることとした。

この関東軍の作戦命令に基き、第8師団は4月初旬から混成第14旅団に1部隊を増加配備して冷口西側の関門方面から攻撃を行なった。また冷口東側からは、混成第33旅団に第31連隊、野砲兵1中隊、特設山砲隊を加えて攻撃を行なって第6師団を援護した。その後第8師団は長城を超えて灤東地区に進入、第6師団とともに張学良軍を灤河以西に駆逐した。

これより以前の3月13日の時点で、混成第16旅団の攻撃で長城以南の新開嶺まで後退を余儀なくされた中国軍は、巻き返しを図って

南天門（新開嶺の北東）付近まで北上、4月12日には第16旅団の正面に大規模な攻撃を行なった。これに対して第8師団は応戦しようとしたが、関東軍は長城以南、関内に対する攻撃を禁止していたため、積極的な反撃ができなかった。

しかし4月18日、関東軍参謀長は第8師団に対して古北口南方に位置する中国軍に脅威を与えることを指示、師団は、以下の4部隊を構えて攻撃することとした。(1) 歩兵第16旅団の指揮の下に、同旅団主力、野砲第8連隊主力、臨時重砲兵中隊、工兵第8大隊主力の各部隊、(2) 第4旅団第31連隊第3大隊、(3) 第16旅団及び第31連隊の追撃部隊並に山砲隊機関銃中隊、(4) 飛行第1中隊。作戦は4月21日から30日にかけて行なわれ、28日には南天門を占領したが、10日間の戦闘で戦死者74、戦傷者232、計306名の犠牲者を出した⁽¹⁷⁾。

南天門占領後、戦闘は新開嶺に移り、第8師団は表11のように、師団の主力である第4、第16の歩兵師団を両翼に構え、これに騎兵隊と砲兵隊を加え、さらに戦車隊と関東軍飛行隊が協力するという構成をとっていた。このうち関東軍飛行隊は、先に示した表3によれば、31年11月に近衛師団によって編成が下令された飛行隊本部、1933年5月に飛行第10大

表11 新開嶺付近の戦闘参加部隊

飛行隊	飛行第10大隊第1中隊
騎兵隊	騎兵第8連隊主力 歩兵第16旅団の乗馬小隊及び乗馬山砲隊 3号無線1
右翼隊	隊長 第4旅団長 鈴木 美通 歩兵第4旅団（第31連隊第3大隊欠） 特設山砲第3・第9中隊 工兵第8大隊 3号無線1
左翼隊	隊長 第16旅団長 川原 侃 歩兵第16旅団（第17連隊の1大隊等欠） 工兵第14大隊 3号無線1
砲兵隊	野砲兵第8連隊 臨時重砲兵中隊
関門守備隊 鯉江支隊 予備隊 戦車隊 師団通信隊 衛生班 協力部隊	歩兵第32連隊の一部 関東軍飛行隊主力

出所：「昭和8年自5月10日至5月13日 新開嶺付近戦闘経過ノ概要」(C1307011600)

隊の下に編成された第1～第3中隊と材料廠、第11大隊所属の第1～第4中隊と材料廠、第12大隊所属の第1・第2中隊と材料廠によって構成されていた⁽¹⁸⁾。

作戦は5月10日に始まり、13日に一段落する。その結果、左翼隊は白河澗西南方面高地付近から高嶺屯北方高地南端の線に、右翼隊は団山子東方高地より馬家嶺東方高地に進出して、さらに南下して敵を追撃した。またこの戦闘によって戦死89、戦傷401を数えた。なおこの戦闘においては、張学良軍の捕虜の話として飛行機と戦車の威力をあげている⁽¹⁹⁾。

14日以降、第8師団はさらに南下して中国軍を追撃、石匣鎮に師団司令部を置き、騎兵隊、左翼隊、右翼隊、砲兵隊をそれぞれ配備して密雲に向い、19日に同地を占領した⁽²⁰⁾。

5月21日からは河北作戦も大詰めを迎える。密雲を占領した師団は、さらに南下しようとするが、前日の20日に関東軍から第8師団の主力を密雲付近に集結して北京に対して強圧的態勢を保持するよう命令を受ける。

師団は、この命令によって北平に向う準備をすることとし、以下の諸隊を配置した。(1) 鈴木少将率いる第4旅団、野砲兵第8連隊、臨時重砲兵中隊、工兵第8大隊主力、(2) 川原少将率いる第16旅団、戦車隊、高射砲隊、工兵第14大隊。このうち第4旅団は、21日以降攻撃準備を整えて22日に出発、一方の第16旅団は、22日の日没後から行動を開始した。

ところが翌23日夜、北京の公使館から、国民政府軍事委員会北平分会主任・何応欽(国民政府軍政部長)から停戦申し入れがあったとの連絡が入り、中国軍との停戦交渉が25日午後密雲で行なわれることになった⁽²¹⁾。

同日、中華民国軍軍使上校、徐燕・謀永津の両武官が、藤原日本海軍武官に付き添われて密雲の第8師団司令部に到着、師団長と参謀長と停戦協定交渉に関する会見を行ない、覚書を交換した。そして31日に停戦協定が調印される運びとなった(塘沽停戦協定)。

停戦協定の締結に向けた交渉が行なわれた25日、新京の関東軍司令部は以下の命令を発した。(1) 中国軍は、延慶-昌平-高麗宮-順義-通州-香河-宝坻-林亭口-蘆台の線(いわゆる塘沽停戦協定ライン)以南及び以西に撤退して停戦を提議した。(2) 関東軍は、中国軍が正義を披歴し、以後挑戦的態度に出ない限り停戦の提議を受け入れる。(3) 諸隊は戦闘行動を停止すること。

また関東軍飛行隊長にも、毎日少なくとも1回は、中国軍が前記(1)の撤退線を越えて前進していないかどうかを偵察、点検するように命じた。

河北作戦はこうして終了したが、この間、5月2日から21日にかけての戦闘で、第8師団は327名の将校と8537名の准士官・下士官・兵員、1728頭の馬匹を動員して、103名の戦死者と355名の戦傷者を出した⁽²²⁾。

塘沽停戦協定によって満洲事変における軍事的衝突は一段落するが、協定締結5日後の6月5日、関東軍は今後の「治安の回復」に関して、正規軍ではない反満抗日ゲリラ(いわゆる「匪族」)の掃討を指示し、警備分担地域を次のように指示した。(1) 騎兵集団-興安省・一部の県を除く奉天省の大部分、(2) 第8師団-熱河省西南部、(3) 第6師団-第8師団と混成第14旅団担当以外の熱河省及び奉天廠の一部、(4) 混成第14旅団-奉天省の一部と奉天鉄道沿線、(5) 独立守備隊-騎兵集団・第6師団・混成第14旅団担当以外の奉天省の大部分、(6) 第14師団-黒龍江省、(7) 第10師団-一部を除く吉林省、(8) 新京警備隊-本来の警備区域、(9) 関東州警備隊-関東州⁽²³⁾。

6. 「熱河・河北作戦」期の第8師団の満洲事件費

表12が熱河作戦の始まる1933年2月分から河北作戦を終える同年6月まで第8師団の満洲

表12 「熱河・河北作戦」時の第8師団満洲事件費
(円)

	33年2・3月	同追加分	4・5月	同追加分
俸給		…	…	
需品費	39,560 (10.8)	…	85,000 (8.9)	
郵便電信費	1,210 (0.3)	…	1,660 (0.2)	
糧秣費	216,189 (59.1)	88,018	352,086 (37.0)	239,987
被服費		…	2,044 (0.2)	
兵器費		…	4,350 (0.5)	
馬匹費	2,102 (0.6)	20,250	31,511 (3.3)	
演習費	5,000 (1.4)	…	…	
患者費	300 (0.1)	…	500 (0.1)	
運輸費	39,535 (10.8)	…	…	563,640
築造費		…	…	
旅費	4,750 (1.3)	…	2,700 (0.3)	
備給	36,620 (10.0)	21,938	67,580 (7.1)	39,818
諸手当		…	…	
接待費		…	1,850 (0.2)	
雑費	20,350 (5.6)	23,891	40,729 (4.3)	32,970
計	365,616 (100.0)	405,752	950,672 (100.0)	876,415

出所：33年2・3月分 = C04011544900, 同追加分 = C04011546600, 4・5月分 = C04011605600, 同追加分 = C04011627300

事件費である。まず各2カ月分の総額は、追加分を含めると2・3月分が77万1千円、4・5月分が182万7千円と、表7の32年4・5月分、あるいは6・7月分と比較すると大幅に増加し、特に6・7月分の増加額は当初の認可額に匹敵している。

諸費用の内訳は、まず当初認可額37万円のうち、糧秣費が22万円と60%を占め、残りが運輸費・需品費・備給がそれぞれ10%、雑費が5%という構成になっている。加えてこの月には、追加分として40万円の経費が認可されているが、内訳が判明するのが糧秣費、馬匹費、備給、そして雑費のみである。またこれらの経費を合計しても15万円と、40万円には遠く及ばないのでそれ以外の経費が含まれていることになる。

さらに、河北作戦時の33年4・5月分を見る。この月も2・3月分と同様に本来の認可額と追加分があり、前者は演習費、運輸費、築造費、諸手当の金額が不明である。当初分は同表にあるように総額が95万円、判明する分の合計は59万円であるから約60%の内訳が分かる計算になる。またそのうちの半額が糧秣費である。

4・5月の追加分は、糧秣費24万円、運輸費56万円、備給4万円、そして雑費3万円の計87

万円と不詳分を含んでいない。ここで追加分として運輸費が56万円計上されていることから、本来の4・5月分の不明分のうちの大部分は運輸費であろう。

あらためて熱河・河北作戦が続いていた33年2・3月と4・5月分の満洲事件費を見ると、師団の満洲派遣時の32年4・5月や6・7月分に比較して備給が多いのに気づく。その内訳は、2・3月分3万6000円では、通訳1万1900円、苦力8550円、運転手4500円、雑役夫2790円、臨時運転手2700円等が主な支出先である。

また同月の追加分2万1938円の支払先は、「〔熱河〕作戦中支那馬車1500両に、10両につき1名の車頭備役に要する経費」である車頭代2万250円と運転手の備給1687円といずれも運輸に関わる人件費が圧倒的である。しかし4・5月分の追加分で圧倒的な割合を占める運輸費56万3千円の内訳は不詳である。

7. 第6師団の満洲事件費

第8師団とともに熱河・河北作戦を戦った第6師団は、1932年12月6日に部隊編成の命令が下って満洲に派遣され⁽²⁴⁾、翌33年10月28日に衛戍地に復帰した⁽²⁵⁾。派遣部隊の編成は表13のようであり、第8師団とほぼ同様の4個連隊、各2個大隊制で、各連隊に機関銃隊が所属していた。また騎兵連隊1中隊、野砲兵2個大隊が編成されている点も第8師団と同様である。これらの総員は5399名で、その他に馬匹627頭、兵器として野砲16門、歩兵砲26門、機関銃30挺、乗用自動車2台等を満洲に送っている⁽²⁶⁾。

同師団の満洲派遣から帰還までの行動は、師団長の坂本政右衛門の「上奏」によれば以下の通りである⁽²⁷⁾。師団は5日から16日にかけて各衛戍地を出発して満洲に向い、到着後、関東軍の命令によって主力部隊は吉林省南部と奉天省北部の警備に、一部の部隊は奉天省南部の「三角地帯」で抗日軍の掃討に当たっ

表13 満洲派遣第6師団編成表

第6師団司令部	師団長：坂本政右衛門	兵器部	経理部	軍医部	獣医部	法務部
歩兵第11旅団	歩兵第13連隊	熊本	第1・第3大隊	第1～第3中隊	第9～第11中隊	機関銃隊
	歩兵第47連隊	大分	第2・第3大隊	第5～第7中隊	第9～第11中隊	機関銃隊
歩兵第36旅団	歩兵第23連隊	都城	第1・第2大隊	第1～第3中隊	第5～第7中隊	機関銃隊
	歩兵第45連隊	鹿児島	第2・第3大隊	第5～第7中隊	第9～第11中隊	機関銃隊
	騎兵第6連隊	熊本		第1中隊		
	野砲兵第6連隊	熊本	第1・第3大隊	第1・第2中隊	第7・第8中隊	
			工兵第6大隊	第1中隊		

出所：「第6師団將校同相当官職員表 昭和7年8月10日調」(C13070914600)、「第6師団留守残地部隊職員表 昭和8年1月1日調」(C13070914700)

表14 第6師団満洲事件費 (円)

	33年2月・3月	6月～8月	8月まで計
俸給	-	-	-
需品費	32,500 (8.9)	34,548	97,300 (5.3)
郵便電信費	1,800 (0.5)	800	2,260 (0.1)
糧秣費	138,450 (38.1)	340,860	568,400 (31.1)
被服費	3,000 (0.8)	7,200	12,400 (0.7)
兵器費	3,000 (0.8)	21,000	26,500 (1.4)
馬匹費	2,000 (0.6)	39,300	65,080 (3.6)
演習費	5,500 (1.5)	3,000	4,000 (0.2)
患者費	2,100 (0.6)	3,500	5,400 (0.3)
運輸費	52,800 (14.5)	307,600	699,130 (38.2)
築造費	15,000 (4.1)	45,000	109,200 (6.0)
旅費	5,000 (1.4)	6,500	6,500 (0.4)
備給	33,000 (9.1)	48,000	80,000 (4.4)
接待費	-	-	-
雑費	29,100 (8.0)	90,000	153,250 (8.4)
計	363,250 (100.0)	945,308	1,829,420 (100.0)

出所：32年2月・3月=C04011549900, 6月～8月・8月まで計=C04011638900

た。

33年2月、熱河作戦参加の命を受け、第10、第14師団の一部、及び騎兵第4旅団を指揮して2月23日に熱河省東部省境を出発し、中国軍と戦闘を続けながら前進、3月2日に赤峰を占領した。その後は、同地周辺で治安の回復に従事し、その後は冷口に向って転進し、第8師団と混成第33旅団の一部を指揮しながら3月10日には白半峪、冷口、及び劉家口の各長城関門を占拠した。

その後第6師団は、白半峪以東、山海関長城線の警備を実施したが、日本軍が長城線に停止したのをみると、中国軍は再び灤河を越えて進出したので、混成第14旅団を指揮して5月7日に灤東地区の2個師団の中国軍を、さらに5月12日には喜峰口北側より灤河を渡河して同河右岸の中国軍10個師団をそれぞれ撃破して16日には唐山を占領した。その頃、第8師団は密雲付近に進出しており、同師団とともに北平と天津に迫ったが、5月末に停戦協定が締結される。

協定の締結後、第6師団は熱河省東北部及び奉天廠西南部の治安維持に当たったが、9月中旬に帰還の命令を受け、10月13日までに各衛戍地に帰着した。満洲派遣期間における同師団の犠牲者は、戦死者及び戦傷死者118名、病死者28名、戦傷者389名、凍傷患者651名であった。

表14が第6師団の満洲事件費である。33年2・3月分が熱河作戦期間中の出費であり、糧秣費に次いで運輸費が多い。糧秣費の13万8450円は認可額であり、その内訳が判明する申請額(15万3600円)によれば、請負賄延べ2万7千人分、1人1円20銭で3万2600円、その他12万1200円であった。また運輸費5万2800円は、3輪曳馬車1万2200台の借上代として1台4円で4万800円の支払い、トラック600台借上げで1台20円で1万2000円の支払いとなっている⁽²⁸⁾。熱河作戦においては、第6師団でも軍需品輸送のための馬車が重要な役割を果たしていることがわかる。

6月～8月分の運輸費30万7千円の内訳は、借上げ車両延べ7万3600両の借上代1日3円50銭円で25万7600円、トラック1台20円で2300台を借上げて4万6000円、人夫1人40銭で1万人を雇用して4000円である⁽²⁹⁾。総じて第6師団の満洲事件費も糧秣費と運輸費の割合が大きかった。

(1) 「第8師団 状況報告 昭和9年2月27日」(C14030074500)。

なお、当時の陸軍は、満洲に派遣する内地師団を従来の2年交代の駐節師団制から常駐師団制に変更しようとしていた。すなわち満洲事

変勃発の約2か月前の1931年7月1日の元帥軍事参事官会議において、参謀総長の金谷範三は、満鉄沿線の権益擁護と駐節師団の輸送費節約、教育訓練上の不便を解消するために常駐師団制を提議し、実施時期と方法については陸軍三長官に一任することとした。その際、常駐の候補に上ったのが第8師団と第9師団という（『神戸新聞』1931年7月2日）。実際は、第9師団が32年2月の上海事変に派遣されて多大の犠牲者を出し、遅れて第8師団が第10師団（姫路）とともに4月に満洲に派遣されることになる。

(2) 「在満陸軍各部隊調 昭和6年拾月調 大蔵省主計局」（A08072188800）

(3) 「前混成第4旅団長 鈴木美通 上奏」1933年9月2日付（C04011733000）

(4) 拙稿「満洲事件費はどのように使われたか」(1)

～ (3), 『北星論集』52巻3号, 54巻1号, 55巻1号。

(5) 第1師団「満洲事件費使用方ノ件」(C04011109000)

(6) 第1師団「満洲事件費使用方ノ件」(C04011131600)

(7) 第1師団「満洲事件費使用方ノ件」(C04011139600)

(8) 第1師団「満洲事件費使用方ノ件」(C04011179300)

(9) 第1師団「満洲事件費使用方ノ件」(C04011187800)

(10) 以下、32年4・5月分の事件費の内訳は、「満洲事件費使用方ノ件 第8師団」(C04011308100, C04011256000)

(11) 以下、6・7月分の内訳は、「満洲事件費使用方ノ件 第8師団」(C04011349200)

(12) 「満洲事件費使用方ノ件 関東軍」(C04011282200, C04011313500)

(13) 以下、熱河作戦の概要は、「混成第14旅団作命綴（甲）昭和8年1月12日～5月25日」所収の「熱河経略計画」(C14030164700)による。

(14) 「関東軍野戦自動車隊行動詳報 巻2（其1）昭和8・2・23～8・3・7」第1章 作戦行動の概要 (C14030413700)

(15) 以下、32年4月20日から翌33年3月28日の豊寧占領までの戦闘経過は、「昭和7.4.20～8.3.28 第8師団熱河経路経過概要 第8師団」(C14030123800)による。

関東軍は、熱河作戦について、「当時満洲国擾乱の重要な根源の一は北支学良政府にあったのであります故に一挙其根源を覆すことは満洲国治安工作の為最も捷徑であることは多言を要せないのであります…。熱河の地はご承知通り北半部は荒蕪たる砂漠、南半部は突兀巍峨なる山地共に交通極めて不便、一条の鉄道もなく我が作戦軍は十数万の敵の抵抗を排除しつつ其目的地に到着するには

七八十里乃至、百数十里の道なき道を踏破せねばならぬのであります。（中略）而も其後方からは之等作戦軍に必要な弾薬糧秣を送らねばなりません。後方部隊の異常なる努力にも拘らず第一線部隊の補給は不足勝て師団長初〔始〕め僅かに戦地において集め得たる高粱や粟の飯に飢を凌がなければならなかったのは勿論弾薬の欠乏を訴へたことも妻々であったのであります」と語り、作戦における軍需物資補給の困難性を強調している（『昭和八年に於ける関東軍の行動に就ひて』昭和9年1月17日）。したがって、満洲事件費においては、運輸費が他の経費と比較しても決して無視できない比率となる。

(16) 「昭和8年自4月1日至4月30日 第8師団熱河作戦経過ノ概要（第5号）」の「第一 第6師団ノ冷口攻撃及其以南地区ノ作戦ニ協力」(C1301011500)

(17) 同上資料の「第二 南天門付近戦闘経過の概要」(C1301011500)

(18) 「関東軍憲兵隊及関東軍飛行隊将校同相当官高等文官職員表（昭和8年5月1日調）」(C13070941800)

(19) 「昭和8年自5月10日至5月13日 新開嶺付近戦闘経過ノ概要」(C13070111600)

(20) 「昭和8年自5月14日至5月20日 石匣鎮付近ヨリ密雲付近ニ向フ追撃戦戦闘経過ノ概要」(C13010111700)

(21) 「昭和8年自5月21日至5月23日 懷柔付近敵陣地攻撃ニ関スル戦闘経過ノ概要」(C13010111800)

(22) 「昭和8年5月2日～5月23日 第8師団河北作戦戦闘詳報」(C14030146600)

(23) 以上、停戦協定から警備地域の分担までの記述は、「昭和8年5月2日～5月23日 第8師団河北作戦戦闘詳報 第8師団」第3 作戦経過 (C14030147900)

(24) 「満洲派遣部隊編成ノ件報告」(A03023589700)

(25) 「復帰完了の件」(C01002937500)

(26) 「満洲派遣第6師団朝鮮内鉄道輸送並立兵站業務実施概要提出ノ件報告」(C01002845300)

(27) 以下、第6師団の各衛戍地出発から戦病死者数までの記述は、第6師団長 坂本政右衛門の「上奏」（作成は1933年10月、陸軍大臣への報告は11月3日 C04011721700）による。

(28) 「満洲事件費使用方ノ件」（第6師団）(C04011549900)

(29) 上同、(C04011638900)

